仲宗根豊見親と鬼虎（うんとら）～与那国攻入りの年代について～

宮古島市史編さん副委員長　下地和宏

はじめに

1500年代の前半半ばは宮古にとって大きな転換期とみられる。八重山のオヤケアカハチ、与那国の鬼虎など王府に「抵抗」する集団が平定される。宮古は平定の一翼を担うが、八重山とともに王府の版図に組み込まれる。その後、半世紀も君臨した尚真王の死去、宮古を統治した仲宗根豊見親の死去を迎える。琉球・宮古の二人の死去によって一つの時代を終えた感がする。

王府に咎められた「野原岳の変」は宮古独自の〈豊見親の世〉を終わらせる。宮古頭職も玄雅と金盛の二代で終わる。新たに大首里大屋子という王府の役職が与えられ、王府の機構に完全に組み込まれる。宮古にとっては「独自」の世界が崩壊した時代でもある。

〈豊見親の世〉に仲宗根豊見親を中心とする宮古軍は与那国の鬼虎を単独で平定する。この事件の年代について慶世村恒仁著『宮古史傳』（1927年、以下『史伝』と略す）は1522年とするが、その根拠については示されていない。これに対して稲村賢敷著『宮古島庶民史』（1957年、以下『庶民史』と略す）は1522年説に疑問を投げかけた。①仲宗根豊見親は高齢である。②金志川那喜多津は正徳8（1513）年大般若経六百巻を買い求めている。この時金志川豊見親と称しているから、兄金盛の亡き跡家督を継いだと考えられる。③忠導氏家譜にある嘉靖年間は正徳年間の誤りであり、「鬼虎平定」は正徳8年以前であると主張する。宮古史に関心を寄せる多くの人々が「与那国攻入り」の年代について疑問を抱きながらも、これといった手当もなく定説化された「1522年説」を黙認している感さえみえる。本稿では『庶民史』の提起を踏まえ、各資料を考証して「与那国攻入り」の年代を考察することを本旨とする。

1．鬼虎の出自

『宮古島記事①』（1752年）によれば、うんとら（鬼虎）は狩俣村の屋号「あかた屋」の人である。うんとらの守姉は村越の「はんた」で鳩がいうには「あかた屋のうんとらはまごの粟と引き替えられ与那国島へ連れていかれる」と鳴いているようだと、うんとらの母に告げたが一笑にされてしまった。鬼とらが5・6才の頃、宮古島は飢饉に見舞われる。その時、与那国島の商人が狩俣村に来て、うんとらをまごの粟で買い取り与那国島へ連れて行き育てた。うんとらは勇力の名をあげ与那国の主になった、という。

一方、『忠導氏家譜正統②』（1757年。以下「家譜」略す）は、鬼虎はもと宮古島狩俣村

の生まれである。鬼虎は 5 才の頃に身長 5 尺ばかりである。その頃の宮古島は飢饉であった。与那国島の人が商売のため狩俣村にやって来た。この人は鬼虎の形相に非凡なるものを感じ取り、米一斗で買い受け与那国へ連れ帰った。成人して後、与那国島の首長になった、という。

両書が伝える鬼虎（うんとら）は、狩俣村の生まれ。5・6 才の頃には身長はすでに 5 尺（およそ 1 m 50 cm）に達し、非凡なる顔つきをしている。飢饉の折節、与那国島の人に米（あるいは粟）一斗と交換され連れて行かれる。成人した後、与那国島の首長になった、とされる伝説を基にしている。

2. サンアイ・イソバと鬼虎

池間栄三著『与那国の歴史』（1959 年）はサンアイ・イソバについて次のように述べている。

サンアイは村の名であり、イソバは女性名である。サンアイ・イソバは 1500 年ごろに与那国を支配していた女傑であったと伝えられている。その名のサンアイは当時最も栄えていた部落名であり、サンアイ・イソバとは、サンアイ村に住んでいたイソバということである（75 頁）。伝説によると、サンアイ・イソバはサンアイ村からソナイ地区に抜け出る唯一の関門であったパサグを体を横にして通ったと言われている。絶壁の割れ目であるが近年まで、牛馬が容易に通過していたのを見ると、イソバが如何に巨体であったかを想像することが出来る（76 頁）。

イソバは四人の兄弟をドナンバラ村、ダディグ村、ダンヌ村、ティバル村の按司に配置していたという。

喜舎場永珣著『八重山歴史』（1975 年）は鬼虎とイソバの関係について次のように述べている。

鬼虎は怪力無双身のたけ一丈五寸（およそ 3 m 15 cm）という怪傑になった。サンアイ・イソバの信任を得て第一の部将となり功績をあげていたが、年月のたつにつれて彼の性格と蛮勇は人の部下としていることを心よく思わずイソバを除いて酋長になろうとする野心が見えてきた。一夫守るも万夫これを攻め難いという与那国の岸壁の地勢を利用してたてこもり、日ましに暴威をふるって島民を強圧して部下に引き入れとうとうイソバ酋長にたてついた（104 頁）。

一方、牧野清著『新八重山歴史』（1972 年）は、次のように述べている。

鬼虎は当初女酋長イソバの部将として信認を受けていたが、自己の力を恃んで野望をもつようになり、次第にイソバに対し露骨に反抗の態度を示すようになった。しかし、イソバも祖納当与人も鬼虎を恐れて手を下し得ず、与那国統治の実権は次第に鬼虎の手に移り、その力の対立関係によって、与那国は風雲島をおおう状況になってしまった（110

頁)。

祖内当与人というのは、1510年王府から任じられた与那国与人のことで、慶来慶田城の2代目に当たる。与人を配置することで王府の治下に入ったと見られているが、実質はイソバが島治を管掌していたとされる。

鬼虎とイソバの関係については、『史伝』、『庶民史』および『与那国の歴史』では全く触れられていない。『八重山歴史』と『新八重山歴史』は八重山に伝わる伝説に基づいて述べたものであろうが、鬼虎もイソバも巨体であることに共通性が見られる。

3．第一次与那国攻め

王府軍は1500年、大小戦船46隻、兵3000人余で八重山のオヤケアカハチを攻め滅ぼした[③]。仲宗根豊見親を中心とする宮古軍は王府軍の先導役として従軍している。漲水御嶽に戦勝祈願までしている[④]。宮古軍はその勝利の勢いで与那国を攻めたという。尚真王に命じられてのことなのだろうか。この時の与那国の首長はサンアイ・イソバという。『与那国の歴史』はこの攻入りの状況を伝説として、概略次のように述べている。

仲屋金盛軍は未明に東崎の南側海岸カラグンに上陸、直ちにダディグ村およびドゥナンバラ村を襲撃、按司を殺し部落を焼き払って軍を西に進めた。悪夢にうなされたイソバはとび起き、パサグよりテンダの坂を一気に駆け下り、アラダトゥ（浦野お嶽南側）まで来たとき、金盛に出会った。イソバは金盛の両足をとらえて吊しあげ、「私の兄弟は生捕りか、それとも惨殺したのか」と叫んだ。金盛はあわてて「惨殺」と答えた。イソバが金盛の体を引き裂こうとしたとき、金盛は「生捕り」と答え直した。イソバは金盛を放免すると、急いで村へかけつけた。按司は惨殺され、村は焼き払われていた。激怒したイソバは引き返したが、金盛はダンヌ村およびティバル村の按司を殺し、村を焼き払い山中に身を隠した後だった。金盛は筏をつくり近くのアラガの津口から脱出したという。一説には密かに兵船を奪還して、上陸地のカラダンから脱出したという（81～82頁）。

黒島で採録された「インシガーヌ金盛ユンタ[⑤]」には、攻入りの状況について、

10、ムドゥサレユ　ヤリバ	アカハチ征討後に与那国征討にいったが、
	地勢の天険に阻まれ
カイサレユ　ケリバ	征討に失敗して　帰郷したが
11、カイサレヤ　イカヌ	敗北して帰ることは　無念である
ウプ宮古ヌ　島イキ	大宮古の　島に行き
12、四十村ヌ　国（フン）イキ	四十ヶ村の　宮古本島に帰って行き
ブザサスニ　ウンタケ	島の長老や幹部に　報告し
13、チィムルシュニ　シィサリバ	島の長老に　報告したが

	アンヤルカ　金盛	そうであったなら　金盛豊見親よ
14、	クリヤルカ　マイフナ	天嶮に阻止さえれたのであれば　君は偉い
	バガフタリ　イクカ	私と二人で、与那国に行こうか
15、	ユルシ　ユルサニバ	ゆるし　許さず
	カイシ　カイサニ	かえし　帰らず平定しよう

と歌われている。金盛豊見親の与那国攻め入りは失敗であったこと、結果を島の長老に報告したこと、そして、再度の攻入りを相談している。

一方、『雍正旧記』所収の「同人（仲宗根豊見親）八重山入の時あやご⑥」では、

5、	我宮古む　大宮古む　津かん	我が宮古も　大宮古も　栄えて居る
6、	大八重山の　下八重山の　人よ	大八重山の　下八重山の　人を
7、	返せ見ま　戻せ見ま　てりいは	攻めよ　討てよと　（命令）あれば
8、	返されの　戻されの　称当から	（前回に）攻め得なかった　うらみから
9、	十百その　十百さの　中から	（今こそは）千百人（数知れぬ）の其の中から
10、	手まさりや　手とめやは　選	手練れの者　手際まさりの者をば　選んで

原歌は『雍正旧記』　　訳は『宮古史伝』

「あやご」の数字は便宜的に通し番号を附した。以下同じ。

と歌われ、八重山（与那国）の人々から最初は追い返されたことがうかがえる。それで今回は多くの兵士から精兵を選んで再軍備して第二次の与那国攻入りを企図する。

また、「家譜」にも「弘治年間（1488 ～ 1505 年）八重山島退治の時、兵船を遣わし之を攻めしむ。然るに兵船、津口に入る能わずして、空しく帰帆するなり⑦」とある。

ユンタ、あやごおよび「家譜」からも分かるように、オヤケアカハチを討ち滅ぼした後、宮古軍は与那国攻めを敢行しているが、果たせず帰郷している。与那国の伝説では宮古軍は上陸して殺人と焼き討ちを行っている。前述の資料とは大きな違いを見せている。あるいは第二次攻入りの伝承と錯綜していないか。イソバと鬼虎の関係もはっきりしていない。

『八重山歴史』は、「イソバは平和工作が成功している今日、鬼虎の反抗がまたしても与那国を戦乱の巷におとしいれることをなげいて心を痛めて熟慮のうえ、仲宗根豊見親の力をかりて彼を除く外はないと考え急いで宮古島に出発した」（104 頁）と述べている。そして、「1522 年赤蜂征討 22 年の後、イソバ酋長は水先案内をして与那国島へ出発した」（106 頁）という。

すなわち、与那国の酋長イソバは部下の鬼虎に追い出される形で、宮古の仲宗根豊見親を頼る。イソバは地理不案内の宮古軍の「水先案内」をして、鬼虎から与那国を奪い返すためもどってきた、というのだろうか。ここでは、金盛とイソバが争ったという『与那国の歴史』の伝説はかいまみることすらできない。

4．第二次与那国攻入り

与那国の首長鬼虎を討つ大義名分を「家譜」は次のように述べている。

「鬼虎は己の武勇を頼み、王化に随わず」ばかりか「与那国島の形勢は四方は巖石で屏風の如く、周囲は干瀬が隠れ、ただ南方に一か所津口（港）はあるが、風波が静かなとき、稍々船は出入りできる。もし一夫これを守れば万夫は進むことができない。それで其の険所に憑（たよ）り、遂に王化に随わず[8]」という。王府にとっては版図確定のためにもゆゆしき事態であったと思われる。それで王府は仲宗根豊見親の忠誠心を確信するためにも鬼虎の「追討」を命じたのではないだろうか。

『与那国の歴史』はこのことに触れて次のように考えている。「多分、ウニトラが成長するに従って、与那国与人の権力を侵してきたのが、討伐の発端となったのであろう。事の急を感じた与那国与人は中山王府に対し、与那国島のウニトラが己の武勇をたのみ、王化に従わないことを報じ、援軍を求め」（84 頁）たとしている。『新八重山歴史』はこの書と大同小異である。『八重山歴史』は前述の通りで、イソバの要請に仲宗根豊見親が応じたものである。

『史伝』は、鬼虎は「己の豪勇をたのんで王化に従わず朝貢を怠ったので、王命を奉じて玄雅（仲宗根豊見親）はこれを討った」（108 頁）といい、一方『庶民史』は「与那国は遠く洋上に離れているので、中山政府の威令も充分行われず、殊に酋長鬼虎は豪勇無双であったので、その武勇を恃んで貢租を横領し不逞を謀ったようである」（222 頁）と述べている。また、『平良市史』（1979 年、以下『市史』と略す）は、鬼虎は「島の統治にあたっていたが、王府への貢租をおこたり民のがわに立って叛いたため『鬼虎征伐』という事件が起きている[9]」（第 1 巻 92 頁）としている。

宮古側の三書は、鬼虎は「武勇」を恃んで王化に随わない上に、「朝貢の怠り」、「貢租の横領」、「貢租の怠り」があったので「追討」を命じられたという。また、「住民の側に立った」貢租の拒否というが、資料がないだけに憶測の域を出ない。しかし、重要な視点であり、「アカハチ事件」と同根とする考察であろう。

いずれにしても、鬼虎は一丈五寸もある大男で、勇力無双、「暴威をふるって島民を弾圧」し、「イソバ酋長にたてつ」き平和を乱した輩で「討伐」に価する悪者として描かれている資料に事欠かない。果たしてそうであろうか。

5．鬼虎討ちの軍勢

王命を受けた仲宗根豊見親は選りすぐりの部将 20 人と神女 4 人を従えて与那国を攻める。この時、嘉靖年間（1522 ～ 66 年）「聖上（尚真王）は殊に御剣治金丸の恩借を賜う[10]」（「家譜」）というが、宝剣治金丸と宝玉真珠は嘉靖元（1522）年、尚真王に献上されたものである[11]。同家譜は続けて「彼地方の逆徒を征討し凱歌を唱い入朝して御剣を返上す云云」

というが、一考を要する。

さて、従軍した美女の神女とは、「すミや大津ゝの主津かさ」、「砂川あふかめ津ゝの主」、「神まさりやいはんとのおも」、「か祢屋大津ゝの主津かさ」の四人⑫である（『雍正旧記』）。砂川村から従軍した神女には「あうがま・くいがま」の姉妹が伝えられ、砂川御嶽に祀られている。ところが、先の『雍正旧記』には「くいがま」の名が記されていない。「家譜」には「平良祝住屋大阿智」、「城祝砂川恋種」「司伊良部伊安登之於母」、「婦砂川阿瑟蛾摩」、の四人が記されている⑬。砂川村からは阿瑟蛾摩と恋種が見え、あうがま・くいがまの二人と見られる。砂川明芳は「城祝砂川恋種」と旧記に見える狩俣村の「か祢屋大津ゝの主津かさ」とは同一人物だと推論している⑭。

与那国島に着いた宮古軍は、まず先に美女の神女四人を上陸させ、諸味麹を鬼虎に献上して、我らの宮古島はたびたび飢饉に遭い、庶民の過半は憔悴している。貴地に投（たよ）り飢饉の苦しみを免れんと遠く風波の難を凌いで、今日幸いに大人の台顔に謁（まみ）えるなり。大人はもと宮古島の人なり。願わくば故土の情を念い、我らの残生を救わんやと涕泣して訴えた。鬼虎は美人の巧言令色に惑わされ、酔に乗じて本船を挽き入れせしむ⑮（「家譜」）。

鬼虎に献上した「諸味麹」について、『史伝』『市史』『八重山歴史』『新八重山歴史』はともに「毒酒」、『与那国の歴史』は「しびれ薬が入る」、『庶民史』は「美酒」とそれぞれ思惑を込めて表現している。

美女四人の計略で上陸した宮古軍の部将を「八重山入りの時あやご」は次のように伝えている。但し、17.21.28.33 番の神女は先述したので除く。解釈は『庶民史』による。

12、中屋かね兄の金盛	豊見親の嫡子中屋金盛を始め
13、堀川里こむり里なら	（堀川里ぐむり里は荷川取なぐむり、かぐむり付近）
14、上ひ屋里東里なら	（上比屋里は或いは東仲の北部ならん）
15、大川盛与那覇むゝ当ら	（与那覇桃太良は目黒盛の曾孫、根間氏の祖）
16、崎原の西崎のかあらもや	（崎原がーらは西崎に居住する倭人の子）
18、あれや生り不こり殿大不ち	（不明。以下七名は平良地方。あら屋の北に当ってありや」という屋号がある）
19、金志川の豊見親金盛	友利の金志川金盛と
20、城なぎ弟なき当ツ	その弟なきたつと
22、下地生れもてやにぎゃもり	下地生りで、もてやにぎや盛（もてやにぎや盛は榮河氏の祖）
23、川根のまんいりのまんぎゃり	（川根は与那覇にあって西のまんぎやと称し、与那覇村白川氏の祖ならん）
24、来間生りワリミやのとの	（来間出身で、合せて下地地方から三人）
25、野崎生れ赤宇立親	野崎村酋長家である赤宇立親

26、伊良部生れ国仲のままら　　伊良部生れの国仲のままら（伊良部出身は以下三人）
27、よかい生れひ屋地のおまのこ　　比屋地うまの子（子孫は不明）
29、池間生れ上ましのけざ　　池間出身二人（子孫は不明）
30、はなれ生れ尻の座のすん
31、磯はなのはげ嶺のまんぎゃ　　（ぱぎ嶺は狩俣にある、まんぎゃは四島の主の父かと思う）
32、かりまたのミなこ地のざもりゃ　　（みなこざは狩俣の東部）
34、大神生り豊見かねせとら　　（狩俣三人、大神一人参加した）
35、土原の内原のおぞろ　　（多良間からは土原豊見親参加）

以上20人であるが、濁点を付し、よう音に置き変えたのもある。従軍した部将の出身地は平良、城辺、下地、川根（与那覇）、来間、野崎、伊良部、池間、狩俣、大神、多良間と宮古中から集められている。但し、二男祭金豊見親、三男知利真良豊見親は「家譜」では従軍しているが、この「あやご」では歌われていない。平良から従軍したのは神女をいれて7人である。

『与那国の歴史』では、祖内當与那国与人は「西表島及びその隣島から勇士を糾合し、ウニトラ退治の準備を急いだのである。波照間の伝説によると、波照間島からもウヤミシヤ・アカタナという勇士が参戦したようである」（85 頁）と伝えている。『八重山歴史』によれば、波照間島酋長「ウヤミシヤ赤多那」と小浜島酋長「大嵩呉座（ごーざ）」を仲宗根豊見親は万全を期して参加させた（106 頁）という。

6．鬼虎の最後

美女 4 人に惑わされ仲宗根豊見親軍を上陸させた鬼虎は如何に迎戦したのだろうか。鬼虎はどのようにして討ちとられたのであろうか。「八重山入の時あやご」は鬼虎との戦闘の情況を次のように歌い上げている。訳は『史伝』による。

36、いくさばな　不あらばなよ　いらべ　　（是等）軍に　好適な人を　選び
37、大八重山ん 下八重山ん へやれいけい　　大八重山に　下八重山に　馳せ行き
38、いくさミやを 不あらミやを すせばど　　軍を――　戦を――　したら
39、あけず舞を　はべら舞を　さおとれ　　（先づ）蜻蛉の舞　胡蝶の舞を踊り（敵を騙した）
40、前手んな　百さるぎ　たうせば　　（愈々）大手には　百突きに　突き立て
41、尻手んな　百かなき　たうすば　　搦手には　百薙ぎに　薙ぎ倒せば
42、与那国の　島向ん　へありいけいば　　与那国の島に　馳せ行き（謀をめぐらして）
43、与那国の　いきはての　鬼とら　　与那国の――　いや極てなる　鬼虎は
44、いき向ひ　へひ向い　立とれ　　馳せ来って　立向い

45、空広が　足なけい　ミやはて　　空広の足を　はねとばして、そして
46、豊見親の　ひさなげい　ミやはて　　豊見親の膝をば　はねとばして
47、返す見と　戻す見と　豊ミや　　どうだ！　討ちかかってみろ　豊見親！
48、あん屋らば　おワ屋らば　鬼とら　　左様か　それならば　鬼虎
49、我刀　治金丸　請見ル　　わが刀　治金丸を　受けて見ろ！
50、声掛ば　言とのいは　にふさせ　　と、掛声も 言う言葉も　遅しと（掛声諸共に）
51、鬼とらを　草ふきたけ　たうすば　　鬼虎を　大木の如く（ドウと薙ぎ）倒せば
52、おんそよく　島鎮　豊たれ　　武運は輝りへ　島は鎮まり　栄えなん

次に「家譜」はどのように描写しているのかを見てみよう。

玄雅は兵を率いて直ちに攻め入る。鬼虎は余丈の大角棒を振り迎戦す。その勇は當たるべからず。玄雅は将に之を避けんとす。田疇を飛び超えんとして深田に跌（つまず）き倒る。鬼虎は大いに笑って、「汝等は今日釜の中の魚なるや。奈何に飛び出し得るか」と言う。その声が未だ終らぬうちに左右より金盛兄弟と金志川兄弟が挟み攻戦する。鬼虎は右に払い左に払い、大喝一声その威なお迅雷のごとし。庶人愕然として引き退る。この時玄雅は田中より躍り出でて、御剣治金丸で鬼虎の右膝を薙ぎ落した。嫡子金盛は走り寄り首を取る。残りの賊は悉く降参する。鬼虎の娘を捕え帰島したという。宮古島には今でも綾語がある。

深田に跌き倒れた玄雅は金盛兄弟と金志川兄弟に救われ、治金丸で鬼虎の右膝に一太刀あびせる。倒れこんだ鬼虎の首を金盛がはねたと、「家譜」はいうが、『史伝』はどのように描写しているのか。

「玄雅は土原に助けられて田中から躍り出で、宝剣治金丸で右膝に斬りつけた。すると後を追っかぶせて仲屋金盛が肩を斬った。そこで鬼虎の気力が漸く衰えた所を住屋大阿智城が槍で突き倒したので、金志川那喜多津は躍りかかって首をとった」（110 頁）という。『与那国の歴史』も『村誌たらま島』（1973 年）も『史伝』を基にしていると思われる。『庶民史』はこの件については触れていない。

「家譜」と相違するのは当時の伝承によるものだろうか。玄雅は土原豊見親に助けられ、鬼虎は神女の住屋大阿智が槍で突き倒し、金志川那喜多津が首を取る。どこでの伝承なのか不明であるが、18 世紀の伝承は他にもいくつかあったのであろう。それにしても神女も武器を持ち戦っていることは自然の姿であったのであろうか。共通しているのは鬼虎１人と数名の部将が対峙している情景である。

『市史』、『与那国の歴史』および『八重山歴史』は『史伝』を下敷にしている。ただ『八重山歴史』は「波照間では赤多那の助太刀で（仲宗根豊見親は）その危難がすくわれたといわれている」（106 頁）という伝説を紹介している。伝説は地域によって我田引水的に伝えられ真実を曇らせる一因でもある。

7.「与那国攻入り」の年代考

「与那国の鬼虎の乱」で知られる「鬼虎討伐」は嘉靖元（1522）年とされている。資料はどのように表記しているのだろうか。嘉靖元年は何に基ずいているのだろうか。

王府側の資料『中山世譜』『琉球国由来記』および『球陽』には「与那国攻入り」の記事は見当たらない。記録するほどの出来事ではなかったということか。宮古側の資料といえば『御嶽由来記』（1705 年）には記録なし。『雍正旧記』（1727 年）の「島中の為メ勲功有之候人由来」に始めて見える。「弘治年間の頃、八重山謀反の企之有る候に付、琉球へ訟候処、討手の御大将當島へ御下り成られ候間、御供達にて八重山島へ罷り渡り、与那国島迄も討ち治め申し候[16]」とある。弘治 13（1500）年に八重山のアカハチと併せて与那国の鬼虎も討ち治めたかのように解釈できる記事である。

『宮古島記事仕次』（1748 年）には「嘉靖年間の事かとよ」、『忠導氏家譜』（1757 年）では「嘉靖年間」と記される。『宮古島在番記』（1780 年）では八重山島を討ち治め、祭金豊見親続いて知利真良豊見親が八重山守護職を努めた、という記事の〈附〉として「此の時、与那国は仲宗根豊見親を召し遣わされ、宮古人数にて討ち治め、彼の島の酋長鬼虎と申す者の女子質捕を以て宮古島へ渡り為る由に候[17]」とある。先の『雍正旧記』の記事を踏襲しているように思える。

先述したように与那国攻めは 2 回行われていると考える。1 回目は弘治 13（1500）年、2 回目は「嘉靖年間」（1522 ～ 66 年）とされる。『史伝』が「与那国攻入り」を嘉靖元年の出来事と考えたことを考察してみよう。

まず、嘉靖元年 12 月建立の「国王頌徳碑〈石門之東之碑文〉」に「首里おきやかもいかなしの御代にみやこよりち金丸ミこしミ玉のわたり申候時にたて申ひのもん[18]」と刻字されていること。「宝剣治金丸」と「玉称真珠」を仲宗根豊見親が尚真王に献上したということ。「八重山入の時あやご」には仲宗根豊見親が鬼虎と闘った刀が「治金丸」であると歌われていること。尚真王から恩借したという「治金丸」を凱旋後に返上したこと[19]（「家譜」）などが考えられる。『史伝』は与那国攻めで鬼虎を「討伐」した「宝剣治金丸」を凱旋記念として尚真王に献上したと考えている節がみられる。それ故に与那国攻めを嘉靖元年としたのではないかと。

果たして与那国攻めと治金丸献上は連動した嘉靖元年の一連の出来事なのであろうか。否定的な見解を示す『庶民史』の考察（223 ～ 224 頁）をみてみよう。

①仲宗根豊見親は齢 65 前後で与那国征伐に従軍したことになり、（年齢的に）少々無理な感じがする。

②正徳 8（1513）年、金志川那喜多津が大般若経 600 巻を買い求めて帰島し、壇を設け経を唱えて国家太平、航海安全を祈願した（『球陽』）という記録が、与那国征伐よりも

以前になることは不合理に感ずる。

③那喜多津はこの時金志川豊見親と称しているから、当時兄金志川金盛は既に死して、兄の跡を襲うて金志川の家督をついで居ったとみなさなければならぬ。

④金志川兄弟は両度の八重山征伐軍に加わっているので、与那国征伐は正徳 8 年以前のこととせねばならぬ。

⑤忠導氏家譜にある嘉靖年間は正徳年間の誤りであると考える。

⑥そうすれば豊見親も 50 歳前後ということになり、無理もないことになる。また、与那国征伐を赤蜂の乱から切り離して別個のこととせずして、その余波であるとする見方とも一致するわけである。

次に嘉靖元年説に疑問をもつ砂川明芳の考えを見ることにしよう。稿本『宮古野馬』(1997 年) の「10 “与那国攻入り” の問題」で、「16 世紀のはじめ頃は 1 年が 2『年』であったなら、22『年』は 11 年である。1511 年ということがでてくる。これは、稲村先学の説に適合するのではないか」と述べている。

1 年を 2『年』とする考えは、『球陽』の舜天王の条に「本国、舜天王よりして夏正を用ふ」とあるによる。「俗説に、往古は以て未月を建てて正と為す。此の月、旧穀已に遂き、新穀初めて登る。是に由りて本国、六月を以て正月と為すと爾云ふ[20]」。歳首〈としのはじめ〉は 1 月だが、正月〈いわい〉は 6 月ということだろう、と砂川明芳は解釈している。「夏正」とは中国の夏王朝が用いた暦という。

与那国攻入りは正徳 8 (1513) 年以前であると考察した稲村説を追認する 1 年を 2 歳とする「夏王」は興味深い。目黒盛、与那盤殿、普佐盛の 120 歳も肯ける。

さて、弘治 13 (1500) 年以降を年表風にみることにしよう。

弘治 13 (1500)　オヤケアカハチ事件。宮古軍、王府軍の先導役として従軍する。

正徳 4 (1509)　百浦添欄干之銘を刻む。其三、戦艦一百艘で太平山を攻む。住民は服従す。年ごとに穀布繇を以てす。国勢ますます盛大になる。

正徳 5 (1510)　祖納當を与那国与人に任ずる。

正徳 8 (1513)　金志川豊見親、中山に上国した折りに大般若経六百巻を買い求めて帰る。

嘉靖元 (1522)　国王頌徳碑 (石門之東之碑文) を建立。仲宗根豊見親、宝剣治金丸と宝玉真珠を献上する。

嘉靖 2 (1523)　豊見親、金頭銀茎簪 2 本 (獅子の鋳形、鳳凰の鋳形) を賜う。

嘉靖 5 (1526)　尚真王死去 (62 才) 在位 50 年。

1500 年の八重山攻入りで王府軍に協力した八重山の長田大翁主は古見大首里大屋子に、慶来慶田城用緒は西表首里大屋子にそれぞれ任命される。王府からは満挽与人が派遣され駐在する。宮古から祭金豊見親が八重山頭職として派遣される。しかし、「人民を暴虐」し

たとの訴えで、4 年後に弟の知利真良豊見親と交替する。1510 年、慶来慶田城祖納當が与那国与人に任じられる。祖納當は用緒の嫡子に当る。

先述したように、鬼虎は成長するに及んで与那国与人の権力を侵してきたので、祖納當は王府に報告、援軍を求めた、との伝承があるという。あるいは祭金豊見親のように「人民を暴虐」したので、与人は鬼虎と対立したのか。『市史』の鬼虎は「住民のがわに立って叛いた」との記述と相応する。しかし、憶測にすぎない。それでも、王府の役人祖納當与人と鬼虎酋長の間に何らかの抗争があったのではないだろうかと思う。それ故に“多勢に無勢”とでもいうのか、与人は王府に援軍を求めざるを得なかったのではないかと。

祖納當与人の伝承は、サンアイ・イソバが仲宗根豊見親に援軍を頼み込んだという伝承と重なりあって、興味深い経緯である。王府は与人の要請を受けて、仲宗根豊見親に鬼虎「討伐」を命じたのではないだろうか。

このように考えてみると、与那国攻入りが宮古軍だけで敢行せざるを得なかったことも首肯できよう。「与那国攻入り」は『庶民史』の提起する正徳 8（1513）年以前が現実を帯びてくる。その年代はせばめられ、正徳 6（1511）年あるいは同 7（1512）年が考察される。1 年を 2 歳とする 1511 年の考え方にも相通ずる。

おわりに

嘉靖元年、仲宗根豊見親は「ち金丸」と「ミこしミ玉（御輿・御玉）」を尚真王に献上した。同年 12 月に建立された「国王頌徳碑」に「欽ミテ尊命ヲ奉ジ、石ニ雕ミ、銘ヲ刻シ、功名ノ碑ヲ立ツ。聖君ノ朝、必ズ應化之祥瑞有ランヌ」[21]と刻するほどである。

この碑文からしても「家譜」が伝える与那国攻入りに際して治金丸を「恩借」して、戦後「返上」したとするのは考え難い。では、仲宗根豊見親はこの時期に 2 つの宝物を尚真王に献上することになったのか。この行為は「悪鬼納加那志に対する絶対服従の表現であると見て差支えない」[22]と断じられる。この時期、仲宗根豊見親には何かが起きている。

豊見親は天順年間（1457 ～ 64 年）に生まれ、嘉靖年間（1522 ～ 66 年）に死去する。次男孫真嘉戸金の生年（1490）から推して、豊見親は天順元（1457）年生まれと想定されている[23]。すなわち、豊見親 34 才のときの孫と考察されている。豊見親は嘉靖元年の頃には 66 歳という高齢である。一方、尚真王は成化元（1465）年生まれで豊見親より 8 才年下である。国王頌徳碑建立の 4 年後、62 歳で世を去る。豊見親は考えたにちがいない。自分が亡き跡の仲宗根一族の将来を。2 つの宝物献上の翌年には金頭銀茎の簪 2 つ（獅子の鋳形・鳳凰の鋳形）が豊見親と妻宇津免嘉に賜られる。「獅子・鳳凰の意匠は王国でも最高のものだったのであって、その上で、金カブ・銀カブという三司官座敷から親方クラス相当を表示する枠がはめられている、と読める。」「豊見親の金簪がいかに破格の処遇だったかうかがえる」[24]という。

仲宗根豊見親は八重山、与那国と再度の島外遠征を果たした。2 度目は宮古軍だけの遠征である。王府に対する忠誠の踏み絵とも考えられる。王府から「破格の処遇」をされたのも「中山にとって仲宗根豊見親は、いわば大琉球国を統一に導いた大功労者だったのである[25]」と評価されているからであろう。豊見親にとって与那国攻入りは何であったか。王府の意に沿う宮古は安泰であることの御墨付を王府から得るためであったろうと思う。

豊見親の一念は亡き跡に顕れる。頭職に就いた金盛豊見親は城辺(ぐすくなぎ)の金志川豊見親を謀殺した科で、王府から咎められ自害する。王府（尚清）は豊見親の王府に対する功績に配慮してか、豊見親の称号は廃止するが、豊見親の四男馬之子（玄屯）を平良大首里大屋子に任じ、王府の地方役人として処遇する[26]。

定説ともされる与那国攻入りの年代について、稲村説を検討してみたが、その可能性は否定できないと考えられる。八重山側の伝承と照らし合せて考えるとよく見えるような気がする。可能性を秘めた年代とは 1511 年もしくは 1512 年を視野に入れるべきであろう。尚真王の死去と相前後して豊見親も去ったと思われる。2 人とも半世紀もの間、統治者として琉球・宮古を治めた。与那国攻入りをどのようにみていたのだろうか。

附　鬼虎の娘の悲劇

鬼虎の娘は“与那国攻入り”で捕虜として宮古に連行される。他に残党 30 余人も連行され、「捕虜は総て労役に服せしめ、墓地や屋敷の垣廊等の石垣を積まさせたと云う」(『史伝』111 頁)。『与那国の歴史』は「御嶽や墓場の石垣造り苦役された」(92 頁）という。ともあれ、「當島（宮古）には（鬼虎の娘）綾語が今に存る[27]」(「家譜」）という。

「同人（仲宗根豊見親）八重山入りの嫡子仲屋の金盛豊見親捕参り候女あやご但鬼虎が娘」というタイトルのあやごが『雍正旧記[28]』に収録されている。また、長編の「可憐なる鬼虎の娘を歌いしアヤゴ」が『史伝[29]』、『庶民史[30]』および『古琉球[31]』に収録されている。このあやごのタイトルを『庶民史』は「与那国乙女のあやぐ」、『古琉球』は「八重山鬼虎の娘の歌」と称している。あやごは与那国に居た頃の鬼虎の娘を次のように歌っている。数字は便宜的に付した通し番号で対句を一行とする。以下、『史伝』のあやごをみることにする。

1、我が八重山(あやいま)　居たるきゃや	我が八重山に　居た頃は
下の国(ふむ)　居たるきゃや	下の国与那国に　いた頃は
2、あァんま添ひど　居たるそが	乳母が添いて　居たが
守姉(もりあね)添ひど　居たるそが	守姉は添いて　居たが
3、大親主ん　すかされ	大親主に　すかされて
崇(やぐ)み主ん　誑(た)らされ	貴き方に　だまされて
4、親阿母(おやんま)ど　さまでていど	夫人になさると　いって

阿母佐理(あむさり)ど　さまでてい　　内室になさると　いって（つれて来られたが）

「17 になるオニトラの一女の花のような女性」（『史伝』110 頁）、「当時年齢十六ばかりの可憐なる鬼虎の娘」は「与那国に居る頃は領主の一人娘として両親の寵愛を一身に集め、深閨の中に育てられ、多くの侍婢にかしずかれて居た」（『庶民史』227 頁）というように、想像たくましく鬼虎の娘像を描写している。乙女の輝きは数え 16・17 歳のころとされる。このあやごから鬼虎が「獰猛な野蛮人㉜」、「蛮勇㉝」、「猛々しい形相㉞」というイメージは難しい。鬼虎は「悪」であるという憶測の描写として作られているのであろう。

さて、「すかされ」「たらされ」て連れてこられた鬼虎の娘はどのような運命をたどったのであろうか。あやごは次のように歌う。

11、はいよはい　八重山下司　　（夫人は彼女を呼んで）もしもし八重山下司
　此のバヅん　水満(みち)てる　　この大桶に　水を満てろよ

12、七重巻き　髪筋(からず)の　　（それで）七重巻きの黒髪が
　一重巻き　成るきゃがめ　　一重巻になるまで

13、白明川ゆ　下り汲(ふ)みゃむ　　白明川へ　通うて汲めども
　寄合川(ゆりあすがあ)ゆ　下りふみゃむ　　寄合川へ　通うてくめども

14、満てばなの　無んにば　　満てよう　筈もないので
　端(ばた)よりの　無んにば　　一ぱいになる時は　ないので
　　（あゝどうしようか）

15、夜占瀬(ようらぜ)ゆ　超えるんな　　夜占瀬を　越える時は
　刀刃(かたなば)ゆ　こえだけ　　刀の上を　こす程につらい

16、外間座ゆ　こえるんな　　外間座を　こえる時は
　大溝(うぶうぞ)ゆ　こえだけ　　水深き大溝を　こす程である

17、藍屋川(あいやがあ)ゆ　下りちから　　（そして距離の近い）藍屋川を汲んだら
　母の屋ゆ　行くだけ　　（実に）慈母の家を　訪ねる程に（嬉しい）

と、底のない桶に水を満たせと無理難題を押しつけた宮古の役人の夫人たちの腹黒さを歌い込んでいる。

白明川はその昔、若き目黒盛と孟仁似の出会った場所である。泉に浮かぶ 2 人の姿が美しかったので、白川を“白明川”と改名したといういわれのある洞泉である。白川苑の南側に今もある。夜占瀬は元八千代バス停の斜め向かいにある“ユーラジー御嶽”のこと。外間座は仲宗根豊見親の処所。藍屋川は第一ホテルの西隣にあった洞泉。

『庶民史』はこの有様を「奴婢としてこき使われた上に、日夜の労役に堪えずして、丈なす黒髪も乱れ落ちて取り繕う隙もなく、その可憐なる姿は道行く人々をして涙を注がしめた」（227 頁）と解釈している。

『雍正旧記』所収の「鬼虎の娘のあやご」は酷使されたその状況を

4、志良か川ど　通ひおり　　（あゝそして！）白明川にぞ　通い居る
　寄合川ど　通ひおり　　寄合川にぞ（水汲みに）　通い居る
5、白明川や　むま屋る　　白明川は　岩窟恐ろしき所ぞ
　寄合川や　あ不やど　　寄合川は　穴深き所ぞ
6、すともての　川おれ　　（あゝ！）朝早く　水汲みにその川へ下り
　明さるの　川おり　　夜の明けしなに　下りて行くよ！
7、称間座を　越んな　　根間座を　越すには
　外間座を　越んな　　外間座を　越すには
8、あぱなけば　つばふむ　　（悲しく苦しくて）仰いでは　咽び入り
　いちゆけば　泪おて　　俯けば　涙が落ちる

のように記録している。1700 年代当時は広く歌われていたのであろうか。なんとも悲しい歌である。宮古の親母はあやごに歌われているように鬼虎の娘を虐げたのだろうか。さて、鬼虎の娘は底なしの桶に水を満杯にすることができたのであろか。『史伝』にもどろう。

18、「はいよはい　細工（さやふ）の小父達（ぶざた）　　「もしもし　細工の小父さん達よ
　此のバヅん　底入れふィさまち」　　此の大桶に　底を入れて下されや」
19、南宗根（ばいぞね）の　住屋立（すみやだて）の　　南宗根の　住屋立の
　小父主（ぶざさしゆ）が　おぽけんど　　小父さんのおかげで
　　（底を入れてくださったので）
20、水や水　満てたりャ　　水はくみ　満てたから
　端ゆらし　満てたりャ　　一杯にくみ　満てたれば
21、「ふみど来す　おやむま　　「くみました　おやむま
　満てど来す　あむさり」　　満てましたよ　あむさり」（と告げると）
22、「汝（うわ）が家（や）ゆ　探（と）み去（び）れ　　「お前の家を　探して去れ
　んにャ帰り　八重山下司」　　もう帰れ　八重山下司」（とゆるされた）

鬼虎の娘は「可憐な乙女」故か、宮古人のやさしい心づかいか、南宗根の住屋立の見も知らぬ小父さんが大桶に底を入れてくれた。それでやっとの思いで桶を満杯にすることができたので、親母の許しを得て故郷与那国へ帰ることになった。親母のひどい仕打ちから解放された鬼虎の娘の気持ちは如何ばかりであったのだろうか。無事故郷に帰ることが出来たのだろうか。

23、漲水の　なげがとう　　漲水の　浜沿いに
　ぱなんつの　なげがとう　　磯道を　つたって
24、泣きな泣き　歩（ある）けばど　　泣きしおれて　歩いて居ると
　よむなよみ　行けばど　　悲しみ沈んで　行って居ると
25、舟がまの　着き居りば　　小舟が　着いて居るので

ミスがまの　着き居りば	浮舟が　着いて居るので
26、「はいよはい　池間の兄達	「もしもし　池間の兄さん達よ
其の舟ん　乗せふィる」	その舟に　乗せてくだされや」
27、「此の船や　あかうた	「此の船は　御嬢様
女乗す船や　有らぬ	女人を乗せる　船ではありませぬ
28、彼所からど　あかうた	あちらから　お嬢様
女乗す船や　来す」	女人を乗せる船は　参ります」
29、「はいよはい　池間の姉達	「もしもし　池間の姉さん達よ
其の船ん　のうせふィる」	その船に　乗せて下されや」
30、「此の船あ　あかうた	「此の船は　御嬢様
親姉のうす船や　有らぬ」	姉御を乗せる船では　ありませぬ」
	（と断わられた）

故郷に帰ることを許されたにも係わらず、今度の難関は船に乗せてもらえないことである。どのような思いで頼みこんだのか、頼る人が誰もいない異郷の地ではさまようことしかない。桶の底を作ってくれた人もいたのに、船に乗せてはならないとの通達でもあったのか。何故にここまでひどい仕打ちをする必要があったのか。宮古にとって鬼虎の存在は何であったのか。いくら捕虜とはいえ、娘にどのような係わりがあるのか。宮古の人が如何にむごいことをしていたのかを示しているあやごではないか。この時代、敗れた者に対する当然の仕打ちでもあったのだろうか。[35]

故郷にも帰れない鬼虎の娘はどうなったのだろうか。とても気になっている。16・17 歳のうら若き乙女なのだ。

31、海浜ば　踏み行き	海辺を　さまよい歩き
ぱなむつば　辿り行き	磯山を　辿って行って
32、袖山の山の　大木が	袖山の嶺の　大木の
高木が　末ぱなん	高木の　梢に上って
33、我んが家ゆ　見上げればど	我が家の　方を見やれば
我が八重山　見上げればど	我が八重山の　方を見やれば
34、ばんが家の　おもかげの	我が家の　俤が
真面にヤん　立ち居れば	目のあたり見る　心地して（悲しさまさりて）
35、涙とゝめ　起たなしど	涙と共に　遂に起たなくなって！
よむとゝめ　起たなしど	悲しみと共に　遂に起たなくなって！
	（斃れた）

この長編の「あやご」は宮古の人が歌い継いできたものであろう。こんな悲しい結末があろうか。『雍正旧記』（1727 年）の段階で収録出来なかったのだろうか。それとも恣意的

に採用しなかったのだろうか。宮古の人々はこの「あやご」に悔恨の念をこめたのであろうか。少なくともこのあやごが歌われていた頃には、鬼虎の娘の伝承はまだ根強く残っていたと思われる。鬼虎の娘の墓も浄水場あたりにあったと聞かされるが今は確認できない。「鬼虎の娘のあやご」は宮古の人々にとって忘れてはならない「あやご」であろう。

〈 註 〉

①『平良市史』第三巻資料編1前近代（平良市役所　1981年）所収。59頁

②「忠導氏家譜正統」①に同じ。342頁

③『球陽』読み下し編（沖縄文化史料集成 5　球陽研究会編　角川書店　昭和49年初版昭和50年再版）尚真王24年　147頁。「百浦添欄干之銘」（1509年）には戦艦1百艘とある。

④ ②に同じ。341頁

⑤ 喜舎場永珣『八重山古謡（下）』（沖縄タイムス社、1970年　207～221頁）

⑥『雍正旧記』①に同じ。55～56頁

⑦ ②に同じ。342頁

⑧ ②に同じ。342頁

⑨『平良市史』第一巻　通史編1（先史～近代）（平良市役所、1979年）91頁

⑩ ②に同じ。342頁

⑪「国王頌徳碑＜石門之東之碑文」（『平良市史』第三巻　資料編　所収、679頁）

⑫「同人八重山入りの時あやご」（『平良市史』第三巻 資料編－所収。55頁）

⑬ ②に同じ。342頁

⑭ 砂川明芳『宮古島郷土史考』第六部（1991年）21～27頁

⑮ ②に同じ。342頁

⑯『雍正旧記』①に同じ。54頁

⑰『宮古島在番記』①に同じ。89頁

⑱ ⑪に同じ

⑲ ②に同じ。342頁

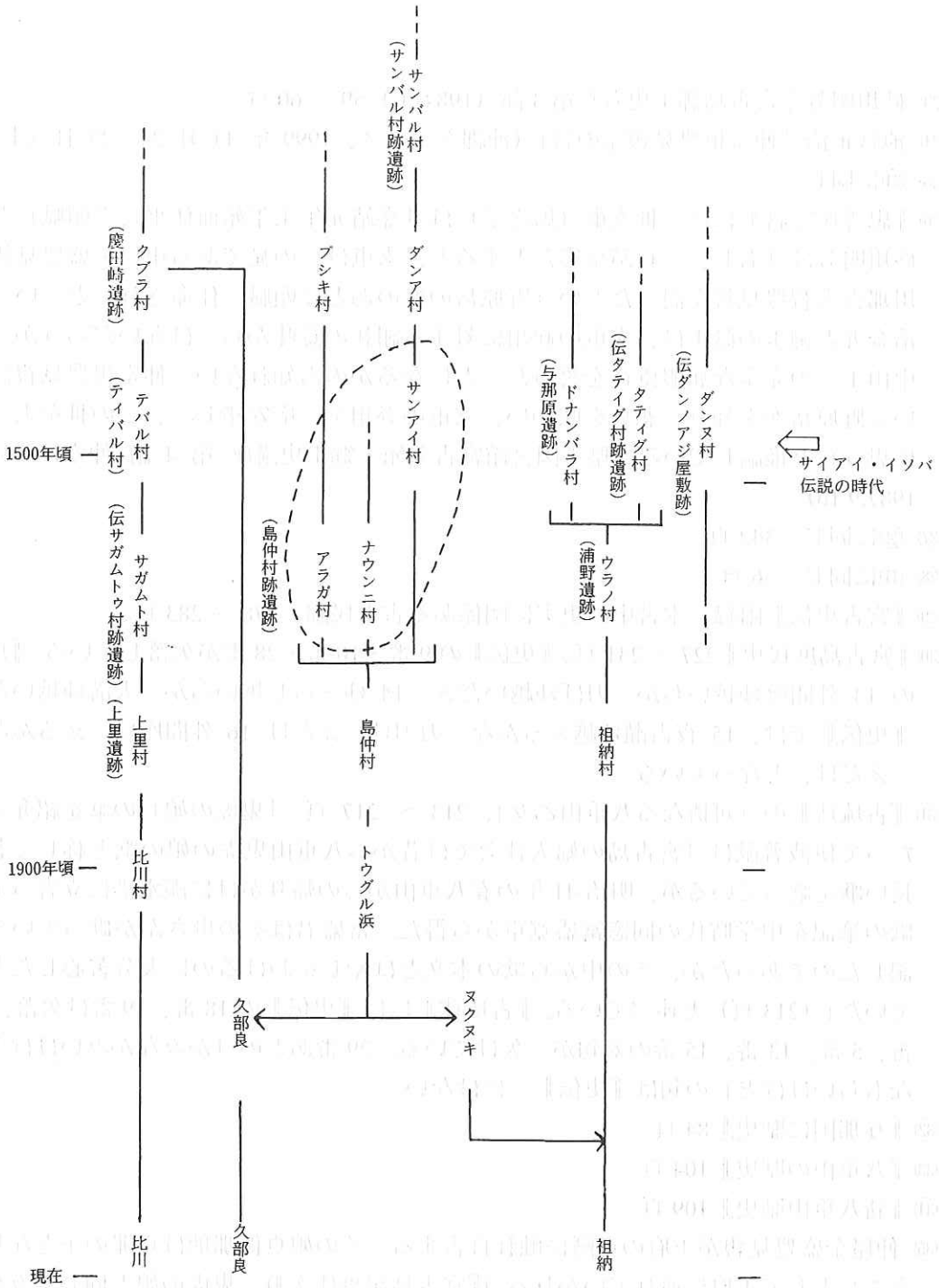
⑳ ③に同じ。舜天王即位元年の条。99頁

中国古代のとしは、歳の次は殷時代になると「祝」となる。これは“祭りから祭り”を意味する。祝天ともいう。とし（祝）のはじまりの月は冬至のある月である。次の時代になると「年」である。これは“木の実のみのる周期”だという（砂川明芳『稿本宮古野馬』）。

㉑ ⑪に同じ。

㉒ 伊波普猷「仲宗根豊見親の苦衷」（再版『古琉球』所収　琉球新報社、1965年）232頁

㉓ 砂川明芳『宮古島郷土史考』第3部（1984年）59～60頁
㉔ 池宮正治「仲宗根豊見親家の簪」（沖縄タイムス、1999年11月24・25日〈上・下〉）
㉕ ㉔に同じ。
㉖『忠導氏家譜』には二世玄屯（馬之子）は「嘉靖元年壬午始而任平良之頭職」とある。砂川明芳は「もし、これが事実だとすると、玄屯はその兄である中屋金盛豊見親が金志川那喜太智豊見親を討ったという野原岳の変のあとに頭職に任命されたと、いうから、治金丸と御玉の献上は、玄屯の起用に対する謝礼の意味からではないだろうか。それは中山王への完全な屈服臣従を誓ったことになるかのも知れない。仲宗根豊見親は生きていて野原岳変を知り、悲哀を味わい、玄屯の登用で一応安堵して、この世を去ったように思う」と推論している（県立図書館宮古分館・郷土史講座 第4講 仲宗根豊見親、1987.9.16）
㉗ ②に同じ。342頁。
㉘ ⑥に同じ。56頁。
㉙『宮古史伝』附録、本書中の史実に関係ある古き民謡。278～283頁。
㉚『宮古島庶民史』227～231頁。『史伝』の9番・10番・28番が欠落している。『庶民史』の 13 外間座ゆ越いちか　刀ばゆ越いだき　14 ゆーらじ越いちか　大溝ゆ越いだき、は『史伝』では、15 夜占瀬ゆ越えるんな　刀刃ゆこえだけ 16 外間座ゆこえるんな大溝ゆこえだけ、となっている。
㉛『古琉球』の「可憐なる八重山乙女」、213 ～ 217 頁。「鬼虎の娘」の歌を紹介するにあたって伊波普猷は「宮古島の婦人社会では昔から八重山鬼虎の娘の歌と称して悲しげな長い歌を歌っているが、明治41年の春八重山からの帰りがけに漲水港に立寄って、此の歌の筆記を中学時代の同窓冨盛寛卓から得た。冨盛君はその奥さんが歌っている所を筆記したのであったか、その中から歌の本文とはやしをわけるのに大分苦心したとも言っていた」（213頁）と述べている。『古琉球』には『史伝』の18番、19番は欠落、1番、2番、5番、13番、15番の対句が　欠けている。29番あとの「かみなかみいけばど　もつなもちいけばど」の句は『史伝』　にはない。
㉜『与那国に歴史』84頁
㉝『八重山の歴史』104頁
㉞『新八重山歴史』109頁
㉟ 仲屋金盛豊見親が王府の逆鱗に触れ自害する。その娘真保那璃は重罪の子となり「おやきこ」として王府に連れていかれる（『宮古島記事仕次』）。鬼虎の娘と同じとみられる。真保那璃は王に寵愛されたが、鬼虎の娘は酷使されるという違いがある。しかし、結末は供にみじめな運命である。



参考資料
○『与那国の歴史』池間栄三　大晃印刷所　1972年（再版）。
○『与那国島の民話集』与那国町教育委員会　1978年。
○『与那国島の文化財』与那国町教育委員会　1979年。
○『球陽』球陽研究会　角川書店　1972年（再版）。
○『竹富町・与那国町の遺跡』沖縄県教育委員会　1980年。
○『慶田崎遺跡』与那国町教育委員会　1986年。
○『与那国』（島の人類生態学）吉川博也　三省堂　1984年。
○『平良市史』第1巻　通史編Ⅰ　平良市史編纂委員会　1983年。

第40表　与那国島の伝説による旧村落地名（江藤・金城作成）
『与那原遺跡』与那国町教育委員会（1988年）より